

2社の教科書採択に反対決議

市民集会に約350人参加

「集団自決」体験者も証言

来年度から中学校で使用する教科書の選定作業をめぐる教科用図書八重山採択地区協議会の玉津博克会長（石垣市教育長）の一連の手法に「調査員の形骸（けいが）（けい）化と協議会の権限強化」と反対している子どもと教育を考える八重山地区住民の会（共同代表・仲山忠亨ら）は17日夜、大川公民館で「子どもと教科書を考える市民集会」を開いた。約350人が参加し、育聯社と自由社の社会科教科書（歴史・公民）の選定・採択に断固反対する決議を採択した。



育聯社と自由社の教科書に断固反対の意志を表明する参加者。「頑張ろう」を三唱する—17日午後9時30分ごろ、大川公民館

住民の会は19日まで、軍による「集団自決」の強制性を証言し、大川公民館で決議文を提出するなどの行動する予定だ。集会では、体験者が日本の教科書採択の手法と新しい教科書をつくる会案の教科書採択の手法が酷似している実態も報告された。

渡嘉敷島の集団自決の体験者で2007年の9・29国民大会で初めて証言した吉川嘉勝さん（77）は当時6歳。軍事の「命令」で北山（にじま）に住民が集められ、吉川さんの家族は手りゅう弾が不発し、母親の「捨てなさい」との一言、難を逃れることができたという。

吉川さんは「日本軍のいない島では集団自決は起こらない」「赤松嘉次隊長が北山に住民を集めなければあのような惨事はなかった」と語り、手りゅう弾を住民に配らなければ集団自決は決行されなかったと語り、軍命による強制があったと訴え、今回の問題に「集団自決は一例にすぎない。当時の教育を復活させよう。国家主義への不安がある」と懸念を表明した。

琉球大学の山口剛史准教授は「今回の規約改正の疑念の根拠となる資料として、つくろった教科書採択した手続きを紹介。教育は子どもたちのためである。現場の先生の研究や努力が保証されるべきだが、教育委員という行政の権威で採択しようとして

いる。教育行政のあり方を考えるものだ」と指摘した。これについて玉津会長は「自分なりに考えてやった」と否定している。フロアからは「私も正しい歴史を二協

議委員会を明らかにすべきだ」となご徳翁な意見が相次いだ。北谷町など島外からの参加もあった。

6日から岐阜市明德（主権・岐阜女子大町で開かれた「第10回学）で、南風盛知佳さんと岐阜女子大学全国書道（八重山一年）と南風盛知千称さん（八重山一年）と八重山か



入賞した（左から）與那地星美さんと、稲本彩さん

南風盛知 千称さん